

東アジアにおける海と交流の諸相

榎本 涉

鐘江宏之・鶴間和幸編著
東アジア海をめぐる交流の
歴史的展開



A5判 328頁
東方書店 [4200円]

本書は学習院大学東洋文化研究所における二〇〇七～〇八年度の研究プロジェクト「東アジア前近代における文化交流」の成果をまとめたもので、二〇〇五年度に始まった学習院大学のアジア研究教育拠点事業「東アジア海文明の歴史と環境」も協力している。本書には編者の「まえがき（鐘江宏之）」「あとがき（鶴間和幸）」と、学習院大学・韓国慶北大学校の研究者による論考が一四本収録される。論考の著者・表題を以下に挙げよう（丸数字は評者による便宜的なもの）

①下田誠「日本武器形青銅器と中国戦国時期三晋青銅武器との接点を訪ねて——兼ねて「物勒工名」形式銘文の一事例」／②鶴間和幸「秦漢帝国と東アジア海域」／③李相勳「四世紀における韓半

島の気候変動と碧骨堤」／④鐘江宏之「藤原京造営期の日本における外来知識の摂取と内政方針」／⑤畑中彩子「長登銅山にみる日本古代の銅の流通と輸送経路」／⑥小宮山嘉浩「長岡・平安遷都と百済王氏」／⑦大多和朋子「遊女」の誕生——「昌泰元年歲次戊午十月廿日競狩記」と文人貴族」／⑧張東翼「高麗時代の対外関係の諸相」／⑨李志淑「高麗時代の官人における落職と復職——李奎報の事例を中心に」／⑩家永遵嗣「一五世紀の室町幕府と日本列島の「辺境」」／⑪近藤祐介「室町期における備前国児島山伏の活動と瀬戸内水運」／⑫禹仁秀「東アジア海国際港としての蔚山の地位とその変化」／⑬洪性鳩「清入関前東アジア国際秩序の再編と日本」／⑭李寶榮「世方

化と東アジアの経済特区の比較——韓国の仁川松島と中国の浦東新区を事例として」

さて、本書のキーワードは「東アジア海」と「交流」だが、私はこの内「東アジア海」という用語を寡聞にして聞いたことがない。Nages Weidatの検索でも「東アジア海文明の歴史と環境」プロジェクトの関連書籍以外はほぼヒットせず、広く認知された表現とは思われない。プロジェクト関係者にとっては何度も説明してきた「今更」のことだろうが、初めて目にする者のためには本の冒頭で簡単な説明をしておくべきだろう。もともと「東アジア海文明の歴史と環境」のコー

中国語 結果構文の研究

—動詞連続構造の観点から—

石村広 著

「動詞+結果補語」構造を、動詞連続構造とヴォイス体系の角度から検討。従来の理論分析に新視点を提示。 A5判 ■5800円

中国語の程度表現の 体系的な研究

時衛国 著

現代中国語の多様な程度表現の実態を、綿密な例文分析と、体系的な観点から程度副詞を中心に追究する。 A5判 ■2520円

ことばの散歩道Ⅲ

—一日中故事ことわざ雑記—

上野恵司 著

范蠡から魯迅・毛沢東まで酷愛読書60年の著者による「ことばの楽しみ方」と日中言語文化エッセイ全76話。 四六判 ■1680円

中国語 40字で伝える日本

シャドーイング用CD-ROM付

芳沢ひろ子・秦燕 著

流しそうめんとは？ 忍者とは？ 日本のもの・こと334項目を美しくこねた「伝わる」話し言葉で表現。 A5判 ■2310円

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

ディネータ鶴間氏の論文②の註3には、「中国大陸・朝鮮半島・日本列島にはさまれた海の名称は一定のものがないので、東アジア海という総称を使用したい。渤海・黄海・東海（東シナ海）・日本海（東海）を含む海域を指す」という説明があるが、ここまで読み込まないと気付かない説明というのはいかがなものか。

東アジア海の範囲は右の通りだが、インド洋・太平洋と接し途切れることなく連続する海洋をこの範囲で区切る必然性は何だろうか。鶴間氏のあとがきを見るに、東アジア海とは前田直典氏の言う「東アジア」や西嶋定生氏の言う「東アジア世界」を前提としている。そして鶴間氏が言う通り、これら東アジア（世界）とは国家を単位とする地域世界である。これを下敷きにした東アジア海とは、つまり分析対象をあらかじめ中国・朝鮮／韓国・日本などの国家に設定した上で、これら国家の間に横たわる海洋空間を名付けたものである。近年の海域史研究の多くが、現存する国家を中心に組み立てられた史観の相対化を目指し、あるいは前提としていないことと比べると、東アジア海という発想がこれと趣旨を異にしている点は認識しておくべきであろう。

ただし本書収載の論文で、東アジア海という用語を積極的に用いたものは①②というのである。本書には日中朝三国の外交や日本国内の流通を扱った論考が多いが、そこでは東アジア海のコンセプトはほとんど意識されていない。これらを総括する表題として「東アジア海をめぐる交流」というのはいかがだろうか。これを見た研究者の多くは、東アジアをまたいだ海域交流の論考をまとめた論集と考えるはずである。斬新なチームをあえて用いる以上は一考すべきだったと思う。

収載論文を見てみよう。まず東アジア海について言及する論文について。①は中国東北部と日本列島・朝鮮半島の青銅器の交流の諸相を物語る既知の知見をまとめた上で、戦国期の韓で製造された青銅戟の事例を紹介したものである。た

だ著者は青銅戟の事例紹介で「筆者の試み(独自性)を示したい」(四頁)と言うが、私にはこれが本稿全体の趣旨とどのようなものか理解できなかった。②は「東方大平原」(華北平原・長江中下流平原)を東アジア海と一体の地域と見て、秦漢帝国におけるその政治的・経済的重要性を論じ、秦漢時代史の読み替えを図る意欲作である。なお本稿は戦国期の燕・斉・楚を「海域国家」と表現する。海に面した国家を意味するようだが、私にとって「海域国家」と言えば、海上交易に基盤を置く国家(マラッカなど)や、海上の軍事覇権を握った国家(オランダなど)が想起され、海に面するだけで「海域国家」と呼ぶのはいささか違和感を覚えた。

⑩は倭人と異民族の接触領域を「辺境」と定義し、辺境と室町幕府の関係を考察することで、一五世紀の日本列島の動向を海上交易の影響に着目しつつ大胆に整理したものである。一五世紀日本の見取り図の一案として興味深い。辺境の具体例としては対馬・津軽を取り上げ、そこ

を拠点とした宗氏・安藤氏とともに外部勢力との交易関係に依拠し、日本の政治権力の動向から相対的に「自立」することとを指摘する。さらに古河公方についても、鎌倉府から排除されてきた北関東の豪族に依拠して古河へ亡命したという側面を見て、これを辺境と共通する「自立」の動向として把握する。

以上三点が、東アジア海における交流を直接扱った論考となる。他の論考についても見てみよう。まず③は三三〇年頃に百済が築造した全羅北道金堤郡の碧骨堤を、海進や波による塩害を防ぎ農業灌漑を行なうための施設であるとしたものの、海水面の変動が根拠とされている。ただし当時の気候や海水面について先行研究の主張はまちまちで、著者も各説の妥当性の判断に苦慮している。歴史研究において気候変動論が注目されて久しいにもかかわらず、なお十分に取り入れられていないのは、研究者によって結論が一定しないところも大きいが、本論文を見ても、やはり気候変動論の扱いの難し

さを感じる。

④は天武朝と持統・文武朝の間で親新羅路線から唐風化路線への転換があったとし、その主導者として大宝律令編者の藤原不比等を想定したもの。大津皇子や長屋王を親新羅派とし、その失脚の背後に唐風化路線との対立を推測するなど、政治史の大枠とも絡めた問題提起をする。⑤は長門国長登銅山遺跡出土の木簡を素材に、銅の輸送先と輸送手段(駄馬による陸路輸送、船による瀬戸内海の上輸送)を考察したもの。⑥は桓武朝を中心に百済王氏の地位を見たもの。桓武は自らの正統性を補強すべく百済王氏に着眼し、その系譜に生母一族の和氏を連結させた。また河内交野での遊獵・郊祠に百済王氏を「蕃客」として参加させ、交野に移住させて経済的にも破格の厚遇を与えたという。なお一九頁、「続日本紀」大宝元年正月朔条の朝賀記事に見える「蕃夷使者」について、直前に来朝した新羅使以外に百済使・高句麗使に相当する蕃客も含まれたはずという推測か

ら、百濟王氏・高麗王氏がこの役割を担ったとする点、傍証が必要ではないか。⑦は「遊女」の初見史料として紀長谷雄「競狩記」（八九八年の宇多院の行幸記）を紹介したもの。「遊女」は八世紀に「遊行女婦」などと書かれたウカレメの新表記と言うが、表記変化の前提に漢籍の「遊女」（川の女神）の用例を指摘する点は、可能性がないとは言わないが、さしたる必然性は感じなかった。

⑧は高麗対外関係史の概説。高麗が「漢族」の宋に対しては最後まで事大の礼と友誼を見せたのに対し、遼・金など「北方民族」の王朝に対しては慕華の情を見せなかったとする点、建国以来三世紀以上、中国南北の大国に挟まれる複雑な国際環境下で国家の存続に成功した高麗の外交政策を、そのような硬直したイデオロギーを前提に評価して良いものか。また五代王朝を「漢族の歴代王朝」とするのは明らかな事実誤認だが（一五六頁）、その背後には五代―宋を正統とする伝統的な史観が働いていないか。⑨

は高麗官人李奎報（一一六八―一二四二）の事例を素材に、権力者の私的意向によって人事が左右されたこと、そのため文人たちが入仕・復帰のために、権力者に自らをアピールしたことを指摘する。

⑩は中世の児島山伏が紀伊熊野社や京都の新熊野社・東寺と深い関係を持ったことを確認した上で、彼らがこれら寺社領の中で瀬戸内水運と縁の深い荘園の経営を行なったことを指摘し、その背後に瀬戸内水運を利用した児島山伏の商業活動を推測する。⑪は韓国蔚山地区における新羅時代と朝鮮時代前期の国際貿易を取り上げたもの。二〇〇八年に発掘された伴鷗洞遺跡の港湾施設紹介は最新の情報として興味深いが、新羅時代の蔚山の評価（インド船・アラブ船の来航など）については、根拠や史料操作に疑問を感じる。⑬は明清交替期前後の女真（後金・清）が日本をどのようにとらえていたかを、朝鮮との関係も絡めつつ見る。清は江戸時代の日本を朝貢圏外に置き貿易のみ行なったが、南明制圧の頃までは冊封朝貢

関係の対象と考えていたという。⑭は現代東アジアの代表的な都市開発プロジェクトとして、韓国仁川の経済自由区域と中国上海浦東の経済特区を比較したもの。

以上、書名の問題で字数を浪費してしまったが、それとは別に各論文の随所で興味深い指摘が見られることは、最後に付け加えておきたい。私にとっては専門外のテーマの論文が多いが、教えられるところも多かった。また私は本書の基になったプロジェクトを存じ上げておらず、編者の意図を誤解しているところもあるに違いない。その節にはお詫び申し上げる。本書に関心を覚えられた読者におかれては、ぜひ手に取ってご一読願いたいと思う。

（えのもと・わたる 国際日本文化研究センター）

